

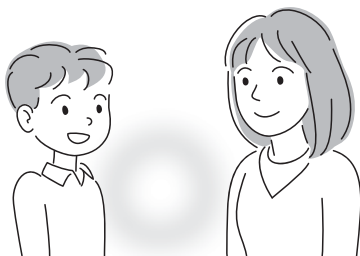
中学生

との対話

中学校二年生の担任をしています。四月からはいよいよ三年生です。よくぞここまで成長したなあと、子どもたちのこの二年間での成長には驚かされます。今回は来年度につなげるために、この二年間で成長してきた子どもたちと自分自身のやりとりをふりかえってみたいと思います（登場する生徒の名前は仮名です）。

「リレーション」を意識して

教師と生徒、生徒同士の間に関係がなければ、何をやってもうまくいきません。「リレーション」とは、互いに

「リレーションは
ついているのか？」

東京都立中学校教諭

加藤 みゆき

かとう みゆき 教育カウンセリング、構成的グループエンカウンターの実践を通して、子どもたちに寄り添うことを大切にしています。

構えない、ふれあいのある本音の感情交流であり、相手に対して心が開かれていて、信頼関係があることです。

「リレーションはついているのか？」

実践で迷っていると、私の教育カウンセリングの師であり、構成的グループエンカウンターの実践者として活躍された

片野智治先生は、いつもそう私に問うてくださいました。「リレーションがあれば大丈夫」とも。しかし、これがそう簡単にはいきません。

忍耐強く待つということ

中学校一年のときから担任している綾。一人でいることが多いので、いろいろと話しかけるのですが、のってきません。はぐらかされてしまいます。

しかし、あきらめることはできません。綾の感じていることは？ 綾の思っていることは？ 綾が言いたいことは？ あきらめずに問い続けました。そして一年半くらいが過ぎたでしょうか、綾が私の前でひょうきんな態度をとるようになってきました。「ここは踊るところでしょう」と、そう言って踊り出したときには本当に驚きました。綾とのリレーションがたった瞬間です。一年半という時間が必要だったのだなあと、感慨もひとしおでした。

同じく担任二年目の陽介。明るく元気

な男の子ですが、新しい人間関係を築くことが苦手で、一年生の頃は休み時間になると、廊下で小学校時代の友達と遊んでいました。私との対話では、返事は返ってくるし、それなりに会話は成立しているのですが、とにかく目が合わないのです。暖簾に腕押し…。そんな私からの一方的な声かけが一年ほど過ぎ、それでもあきらめることはありませんでしたが、見通しはもてませんでした。

陽介と目が合うようになったのは、二年生の半ば頃からです。何か出来事があったわけではありません。「班長として困ってるんだけど」とか、「先生、今日はどこへ出張に行くの？」などと、陽介から私にかかわろうとしてくれるようになりました。

私が出張に行くことは、あきらめずにかかり続けた。ということですが、私にとってはなかなかしんどいことでした。「私には話したくないのかな」「私の関係を築くことには興味がないのかな」などと考えたり、時には無視されているようで落ち込んだり、気持ちが大いに揺

れるのでした。それでも忍耐強く待とうと心に決め、その時々が来ることを信じてかかわり続けました。

ふりかえてみると、綾の気持ちも陽介の気持ちも、この二年間を通して少しずつ動いていたように思います。生徒たちが自分を語り出す時期には、それぞれに自分のペース、準備、タイミングというものがあるのだなあとということも教えてもらいました。無理して話させなくてよかった、あきらめなくてよかった、かわり続けてよかったと、本当にそう思います。

生徒それぞれの語りに寄り添う

いろいろな生徒がいますが、変化への抵抗を示す子が少なくないなあと感じています。変化することへの抵抗。今の自分を変えないように、変えられないように、自分をコントロールする子どもたちです。人との積極的なかかわりを避けたり、自らをあまり語らないようにすることで自分を守る、そんなイメージでし

ようか。

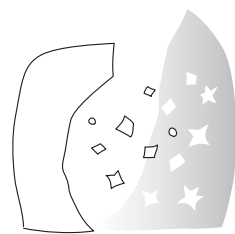
里美はとつても小さな声で話す子です。休み時間も一人でいることが多く、そしてしておいてほしい…。そんな雰囲気です。その里美が夏を過ぎて、部活を辞めたいと相談に来たときのことです。辞めたい気持ちをそのまま受け止め、つらかったこと、心が傷ついたことに寄り添おうと話を聞きました。里美を変えたり、論じたりしようという気持ちは微塵もありませんでした。

部活を辞めて学校の中でのつながりが少なくなっただけではと心配した私は、毎日、朝の会が始まる少し前、里美とちょっとだけやりとりを交わすようにしました。三〇秒くらいです。すると、二か月くらいが過ぎた頃の昼休み、「先生、何か先生のお手伝いすること、ありますか」と声をかけてくれました。うれしかったですね。里美が私を助けたいと思ってくれ、しかも自分から話しかけてくれたのですから！ 今も昼休みに一緒に作業をしながら語り合うという時間は継続しています。

雪子は自分に自信がなくて、「私なんか」とか、「私さえないなければみんなはもっと楽しいのに」と日記に書く子です。顔は笑っているのに、心の中で自分を責めている雪子と、本音で語り合いたいと思っていました。そんなある日、雪子の苦手な体育が二時間あることになりました。雪子の気持ちを察して「一時間終わってダメそうだったら早退する？」と声をかけました。「そんなことをしてもいいの？」という顔でした。

その日あたりからでしょうか、雪子が自己主張してくるようになりました。そっと私のそばに来て、小さな声で「もっとうしろしたら、みんなのためにいいと思う」とか、「私はこうしたい」とか……。まだまだ自分に自信をもつところまではいっていませんが、日記ではなく、直接、私に気持ちを語ってくれるようになりました。

里美にしても雪子にしても、大きく変化した、大きく成長したこの半年だったと思います。ふりかえってみると、問題を解決しようとか、この状況を何とか変



えていこうという気持ちは私にはなかったと思います。考えていたことは、この子たち一人一人とリレーションをつけたい、その一心だったような気がします。

教育カウンセリングで私は、片野先生から「リレーションができていないところでは、自己を語れない。抵抗が起きてしまう」ということを教えていただきました。リレーションがついたことで、里美にしても雪子にしても、自分なりの方法で語り始めてくれたのではないかと思っています。

リレーションを土台に、 進路について語り合いたい

私はかつて、エネルギーッシュで、パワ

フルで、元気よくクラスを引っ張っていきたく担任でした。「ついてこい！」くらいの気持ちがありました。「元気な大人の生きる姿勢を見せてこそ教師だ！」などという思い上がった考えがあったのだと思います。ふりかえると、どれだけの子どもを傷つけたことかと自責の念が私の心を締めつけます。

対話には、子どもがこの先生に話してもいいというリレーションが何よりも必要だということを体験的に学びました。今の私は、リレーションをつけるためにあきらめずにかかわり続け、子どもが自ら語りたいと思える時を忍耐強く待ち、一人一人違う子どもの語りに寄り添っていきたいと思っています。

この春、子どもたちは三年生に進級します。義務教育の最終年、一緒に進路について語り合っていくことが楽しみです。子どもたち一人一人と、何が好きなのか、何ができるのか、何をしたいのか、どんな働き方をしたいのか、どんな生活をしたのか、大いに語り合っていきたいと思っています。